

初期段階における外国語(英語) の指導方法

岡 田 久

外国語教育について云々されている今日、益々、その重要性和指導の在り方が、クローズアップされて、指導者達の責任は重大なものとなっている。戦前、戦後とその指導の仕方も目まぐるしく変化してきているが、いわゆる消極的な、即ち、読み、書き偏重の Bookish English の勉強法より、直接に耳で聞いて話すという積極的な方法が要求されるようになってきている。

要するに、社会に出てから、すぐに活用できる役に立つ外国語の習得が求められてきたのである。学校教育においても、このような変遷にもとづいた外国語教育がなされるように努力されてきている。役に立つ外国語という事は、その習得した外国語でもって、自分の意見を発表し、意志の伝達をはかり、何らかの形で、社会に貢献することが出来るものである。又、大きな見地よりみて、世界の人々と手を握り合い、世界平和のための“かけ橋”となろうという願望でもある。

さて、現在の言語教育をふり返って見ると、外国語の学習目標はともあれ、満足の出来る指導法がなされていない状態にあり、社会的な批判や叱責をうけているのは否めない事実である。目に見えないこのような批判と叱責、又、外国語指導の結果を目の前にするとき、撫然とならざるを得ないのである。

中学校で3ヶ年間、高校で3ヶ年、大学に入って、一般教養課目として一ヶ年、乃至2ヶ年という長期間の間に外国語と親しく交ってきたつもりであるが、いざ実践の場である社会に出た時に、それが殆んど活用出来ないという事実を知らされることが多いのである。

従って、如何にすれば、活用出来る外国語を習得することが出来るかという問題がおこってくるのである。故に、筆者自身が体験した入門時代の外国語教育をもとにして、まず外国語(英語)教育の初期段階について少しくのべて見たいと思う。

Example I 入門期 初時限目

外人教師 : red, yellow, black, white, pink, purple などの色紙をもって入室する。入門期の外国語(英語)の勉強の最初の日であり、又外人とののはじめての出会いでもあるし、少しばかり恐怖心を感じさせられたが、外国の言葉を然も外国人に教えてもらえるという気持が、外国語の入門期の勉強に強い興味をもたせられたものである。

外人教師 : (赤い色紙をとりあげる)

red paper と発音する

逐次、white paper, black paper, pink paper と具体的な物象を目の前にぶらさげて、何回

も発音を繰返す。次に、class 全員の発音指導があって、充分に正しい音がきけるようになるまで、反復練習を繰返す。ただ鵲返しに先生の音と同じ音を出すように努力し、先生の口の形を真似して、教師、入門者共に真剣な反復練習が行われるのである。

individualの指導は特にきびしく、常に、反復練習が要求されるのである。色紙の名前が英語で言えるようになると、直ちに、動的な練習に移行していくのである。

外人教師：窓の方に歩いていき、窓をあけて、色紙を投げる。

red paper I throw out.

green paper I throw out.

生徒は意味はわからないが、窓の所にいて窓をあけて、外に投げ出す、というこのしぐさが、I throw out. の意味だという漠然とした知識を頭に入れる。アイ ヲロ イ アウイ と正確な発音より、ずい分とかけはなれた音を耳に入れてしまうようであるが、その時点においては、一切の音声学的な説明も、口の形、舌の使い方の説明も、一切不必要であると思う。入門者の耳には、red paper はレッドペーパー、I throw out はアイ ヲロ アウイ としかきえないのである。I throw out. の意味がほぼのみこめたら、yellow paper? Yes it is. 等の文章に入る。Yes, No, の肯定、否定の語は gesture に依り、又色々な物を示して、その相違を会得させる。

Yellow paper ?

Yes, it is.

Red paper ?

Yes, it is.

Green paper ?

Yes, it is.

Yes, it is. は エス、ディス ときこえたものである。イエス、イット イズと発音する学習者をよく見受けるが、it の i は i: ではないので、エス、ディス と発音するのは、音のとらえかたが、ほぼ正確であると思う。

以上のように、入門初期より、外国人教師によって手ほどきを受けられるということは、たしかに恵まれた環境であるかも知れない。直接に耳に伝わる音は、懸命な集中力と口腔器官の正しい模倣によって、発音されたそのままの音をとらえることが出来るものであるが、そこまでいくのには徹底的な訓練と反復練習が第一義的な必須条件とされているのである。但し、指導者が外国人教師であれ、日本人教師であれ、その指導の仕方が同一なものであっても、なくても、効果は同じであると思う。要するに、指導者自身の指導能力と努力が要求されるのである。

中学校学習指導要領の中に示されている外国語の目標として

1. 外国語の音声に慣れさせ、きく能力及び話す能力の基礎を養う。
2. 外国語の基本的な語法に慣れさせ、読む能力及び書く能力の基礎を養う。

3. 外国語を通じてその外国語を日常使用している国民の日常生活、風俗習慣、ものの見方などについて基礎的な理解を得させる。

となっている。但し、上述したような外国語教育は、第一項目にしるしてあるように、外国語の音声に慣れさせ云々にあらわれているように、外国語学習の入門期にはたしてどの位、このような目標に対する指導を受け得るであろうか、それはごく限られた数であると思う。勿論、指導要領に示されている目標に向って、私共外国語教育にたずさわっている者達は、日々努力を重ねているものであるが、然しながら、ややもすると、要領の項目と担当者との間のミゾが深すぎて、努力が実り得ないのも事実である。

日本人教師が自国語を一つも使用しないで 50 分の授業をこなそうと思えば、相当な精神的消耗をきたすものであり、学習者に理解させようとする努力が、かえってマイナスになり焦燥感におそわれる場合もあり得るのである。英語を話す外国人が英語を教える場合に、Direct Method を使用するのは、極く自然のことであり、何の困難もなく時間をすごすことが出来るのは当然のことであるし、又一方、学習者達も相手が外国人であるということで、自国語での説明を要求するという気持も出ないことが好結果をもたらす一因ではないかと思う。従って、日本人が入門期の学習者、又は既に相当の知識を身につけている人達に、指導要領の第一項をほどこそうとする場合、別に外国語のみで教えるという必要はなく、相手の動きや雰囲気などを見ながら、自国語で説明を加えれば、効果がもう一つ挙がるものと思う。又そうすることによって、我々日本人に一番適した指導法をつくりあげていくことが出来るのではないかと思う。又同時に、自国語のみでは、外国語の指導は絶対に不可能であるということを再認識することも出来ると思うものである。但し、何時も、Direct Method であるということを頭に入れて、やむを得ない場合のみの処置であるということをしっかりと守っておかなければ、Direct Method の精神が Translation Method に逆もどりする恐れも出てくる。

中学校入学当初の外国語の入門期には、常に thinking in English の習慣を身につけさせるように指導し、それと同時に、“英語で話すと”いう習慣をしっかりと身につけるように訓練をほどこさなければならぬと思う。

幼児が物をおぼえる時に、母親なり、父親なり、又周囲の人々の出す音を真似る模倣よりはじめるのと同じように、極く自然に身につけることの出来る自然的な方法や、前にのべた例文のように、事物を示しながら、目、耳、口、その他のからだ全体で会得していく Direct Method は、この入門期には絶対に欠かすことの出来ない指導方法である。question-answering の反復練習において、hearing-speaking の技術を体得させて、然して、reading-writing の能力を増進させるように導くべきであると思う。尚、Natural Method にしろ、Direct method にしろ、要するに、音声に早く慣れさせることである。音声というものは頭で理解し、おぼえさせるものではなくて、ただ反復練習の習慣のもとに形成されていくのである。

一応の hearing と speaking になれたと見なすと、次は、やや長目の英文の暗記作業から文章の構造習得へと訓練をしていくべきである。

Example : 1. This is a very big animal.

2. Tokyo is the capital of Japan.

3. Mt. Fuji is the most beautiful mountain in Japan. etc.

上記のような文章があるとする。教師の数回の音読と文章の中に出ている単語の意味が理解されると、クラス全員で音読し、あとで、座席順に一縦列でも横列でも可— 1人々々に文章の一つ一つの単語を順番にいわせてみる。例えば、This is a very big animal. の場合は、最初の者がThis 次の者がis、三番目がaというふうに、結局6人の生徒でその文章が完成するように作業させるのである。頭に入れこみ、十分に理解していないと、前の席の者がいった言葉を忘れてしまって、困惑させられる。指導者の努力はさることながら、学習者も終始、真剣に全力を出して消化しようという気持がわいてくるものである。勿論、外国人教師に限らず、日本人の教師であっても、同様な指導法を用いれば、その成果も同一であり、決して相違はないことをつけ加えておきたいと思う。然しこのような学習作業は、時間的なものがweightを占めているために、長びけばだれる恐れがあるし、又いや気がさすものも出てくと思う。然し、あまやかされしないで、“当たたらどうしよう”という気持が、真剣さをさそって、学習作業の効果を挙げるのも大であると思う。

次に、入門期の学習者達に対して、4週間のDirect Methodによる特別教案を作製し、外国語科(英語)の目標に一步でも近づけばという気持で、その指導方法や結果などを少しくのべてみたい。

音声になれきすために、出来るだけ指導者の発音に似せて音を出すように指導し、直ちに教材に入るようにする。この場合に外国語に関する、例えば、その言語を話している国民とか、歴史とか、地理的な話とか又その他の一切の予備知識的な話は一切あと廻しにして、直ちに言語そのものの指導にはいるのがよいと思う。目を輝やかしてまっている者に、長いおあずけを与えるのは、かえって気分をだれきす原因にもなりかねない。このような話は一応、外国語というものに接したあとで説明するのが適当である。

まず音声に慣れきすために朝の挨拶より入る。

教師 : Good morning, girls.

生徒 : Good morning, teacher.

girl と teacherの発音練習をクラス全体及び個別的になす。girl は グール, teacher はティチューと耳に直接入った音をそのままに口の外に出すように指導をなす。その場合、指導法がDirect Methodとはいえ、相手は日本人の入門者であり、急所々々の説明は母国語でなされても良いと思う。20分位で、舌の使い方、口の動かし方に慣れてくる。r と l の発音には特に注意して反復練習をなし、正しい音の把握に努力させる。日本人にとって困難な音ほど、この入門期の初期に正確な音を入れておくべきである。好奇心と進度とのタイミングをよく照しあわせながら、反復練習をなす。個々人には、特に舌の位置、口の形、音の出し方などを実例を示してその通りにやらせるようになる。揚子や小さな手鏡などの小道具を使用するのも効果があがる。尚、このような入門者達の努力と好結果に対して、常

に喝采を忘れないこともよき指導法の一つであるということをつけ加えておきたい。

Good morning, girls.

Good morning, teacher.

の挨拶がスムーズにいえるようになると、早速、気分転換とリラックスを目的とした歌唱指導に移る。

この歌唱指導はクラスの気分を別の方向に転換させる実にすばらしい勉強法である。

song : Good morning to you,

Good morning to you,

Good morning everybody,

Good morning to you,

上記の歌はよくしられている歌であるので、既に歌える者に対しては特に発音指導を十分にやらないと一度おぼえこんだ悪い発音は、なかなか取り去ることが出来ないのです、始めのうちに十分に訂正させておくべきである。

次に、入門期4週間の指導案を図示して、説明があれば、そのつど説明していきたい。

(图表 I)

入門時 4週間の指導方法

項目 段階	時間	内 容	教 材
初 期 段 階	入 門 期	始めから正確な音をとらえさす為に、舌、歯、唇、口の使い方や開きかた等の説明を充分になす。	Colour papers の使用 Good morning, girls , everybody , teacher
	初時 限目	練習：クラス全員又は個人 歌唱指導	同　上 Good morning to you, Good morning to you, Good morning everybody, Good morning to you,
	二時 限目	初時限目の練習 Yes, での返事	同　上 Miss A ? Yes,
	三時 限目	1,2 時限目の練習 Direct Method による英文への導入 (動作によって文章の意味をとらせる。)	Stand up. I stand up. Go to the door. I go to the door. Open the door. I open the door. Go out. I go out. Come in. I come in. etc.

項目 段階	時 間	内 容	教 材
初 期 段 階	四 時 限 目	既習の材料で反復練習，徹底的な個人指導。 (列対抗で練習をしたり，教師になったり，生徒になったりして，積極的な活動を指導する)	Good morning の挨拶より， Good morning の歌及び 2,3 時限目の 反復練習の徹底。

上図表は外国語（英語）の勉強をはじめた入門期の最初の一週間の勉強状態を示したものである。

新しい課目ということもあって，みんな真剣に又活発にたのしく過ごすことが出来るものと確信している。音に早くなれさすためにも，発音指導はきびしくなされるべきである。ただ一つの難点とはといえば，中学入学前すでに多少の外国語（英語）の知識をもって入学してくる者がいるが，人よりも知っているということで，教室において，不柔順である場合もあり，又一度，頭に入れてしまった音を訂正するのに時間がかかるときもあるが，本人のやろうという意志を尊重しながら除々に正しい方向に指導していくべきである。順応性の旺盛なこの時期をうまくつかまえて，柔のみの指導でなく，剛の精神をももって，当初よりあたるべきである。

（図表 2）

二 週 間 目

項目 段階	時 間	指 導 内 容	材 料
初 期 段 階	一 ― 二 時 限 目	一週間目の既習の反復練習のあとで， 語彙力をつける為に，身近かなもの 又は知っている言葉を取上げて材料 とする。 例：身体の一部（頭部，顔面，そ の他等。）	desk, chair, pen, pencil, flower, vase, picture, chalk black board, curtain, etc. head, eyebrow, eye, nose, mouse, ear, neck, hand, arm, finger, ……… etc.
	三 時 限 目	1－2 時限目で習得した語彙の練習。 (pair 又は group で自然に頭に入る ように動作をつけて練習をさせる)	上記及び既に頭に入れている語彙をつか っての練習
	四 時 限 目	既習のものの反復練習及び歌唱指 導	A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z Oh do you see, Now I can say my A B C.

(図表 3)

三 週 間 目

項目 段階	時 間	内 容	材 料
初 期 段 階	一時 限 二目	既習の練習 アルファベットの歌、26文字の発音 の徹底的な指導と練習	図表 1 と 2に出ている材料を使用し ての反復練習
	三 時 限 目	Alphabetの発音が出来て、26文字 が完全に頭に入ったのを確認した後 で、home work 用として活字体 のかきかたの指導に入る。 (大文字、小文字を三回にわたる)	同 上 A－Hまでの活字体の大文字と小文字 のかき方
	四限 時目	既習のものの反復練習、活字体	同 上 I－Q

(図表 4)

四 週 間 目

項目 段階	時 間	内 容	材 料
		既習の練習 活字体 Text bookの使用 (教科書を使用するが、常にDirect Method にて耳から学ぶように指導 する。Word-order の指導のため、 既習の単語を用いて反復練習をなす。) 注： Text bookは開かせない。	Be Verb I am a girl. Am I a girl ? You are a boy. Are you a boy ? He is a boy. Is he a boy ? She is a girl. Is she a girl ? ----- I am a girl. dog. I am a dog. Am I a dog ? cat. I am a cat. Am I a cat ? etc.

以上のように図表でもって、入門期の初期の指導と実践の方法をしるしたが、12才～13才頃の年齢は、外国語をまなぶという自負心と、又旺盛な暗記力と、あるいは素直な順応性の為に、自国語の説明がなくても、指導者の言動でその意味を察し、欣喜として演習に参加し、いやがうえにも学習意欲をも

りあげていくものである。中間に 26 文字のかき方の指導を入れたのは、次の外国語(英語)の授業までのつなぎとして入れたもので、今終了した時間が次の授業まで続いているのだという気持ちをもたせるために、home work 用として挿入したものである。はじめより、かく事のみに専念するのはさけるべきである。尚、教材を作製するときに、学習者自身の好きな絵とか、又みじかなものでよく使用している名詞などの絵をかいもらったりして、それらの材料で授業が進められると、活気にみちた楽しい時間になると思う。教室全体活動、グループ活動、ペア活動又は個人活動と、その演習方法も変化にとんだものを用いると、一層の効果があがってくる。

約 4 週間の耳の訓練と口に出して話すという練習をおえた後は、外国語(英語)の勉強というものに對して、緊張した気持ではなく、反復練習によって必らず自分のものにすることが出来るという自信をもって来る。この 4 週間の音に慣れるという過程が終了すると、いよいよ教科書を中心とした単元で進められるが、今までに相当な知識を得ているので、外国語というものに対する一種の かわき なる感情が取り除かれ、又逆に今までに練習してきた事を早くスラスラと話し、かきたいという欲望が生じてくるのである。勿論、教科書を使用する時も Direct Method を使用するのには申すまでもない。既習 Lesson を home work として課すことも、大切な指導要素の一つであると思う。大体において、学習者の勉強意欲が高揚するか、低下するかはこの Text book の使用より生じてくると思う。

今までの積極的な勉強から、消極的な受身の立場におち入りやすいという事、又若さあふれる五体を動かしたいという学習者達の欲望が低下の原因をかもしたて行くという事は事実である。クラスや又個人々々のその場の雰囲気を一早く把握して、タイミングのよい指導をしないと、今までの努力がマイナスになることもありうる。尚、歌唱指導の長所として、リズムにのってクラス全体がわき上がり、自然に音声面においても、又歌詞指導面においてもプラスとなり、一挙兩得の学習法である。入門期の 4 週間内に、“Good morning to you” や、Alphabet song を歌うことが出来るようになり、教科書の右上端にしるしてある頁数によって、数えかたの練習をする時にまず、下にしるす歌を歌うことによって、極く自然に数の勉強が出来て、自信がもてるようになる。

Song : John Brown had a little Indian

John Brown had a little Indian

John Brown had a little Indian

One little Indian boy

One little, two little, three little Indians

four little, five little, six little Indians

seven little, eight little, nine little Indians.

Ten little Indian boys.

上文の歌詞の中に出てくる数の部分を適宜に変えて、例えば、eleven little, twelve little, thirteen little Indians, etc., 歌いながら練習をしていくと 100 までの数え方であれば退屈し

ないで容易に頭の中に入れる事が出来る。舌の動き、歌のよしあしよりも楽しんで新しい事物にぶつかっていくという態度を培っていくべきである。尚、歌詞の中に出てくる文字——L, T, D, B, V, F, R, N, etc.,——の舌の位置や発音のしかたは、反復練習によって十分に指導し、口腔内機関の正確な使用を厳重に守らせるべきである。歌えるようになると又かいてみたいという欲望も出てくるので、home workとして、かく練習を課すのも好結果をもたらす一因である。

入門2カ月頃より、そろそろと退屈を感じてくる生徒を見うけるが、このような場合もやさしく歌ってきかせ、柔らかにクラスにひきもどしてやるようにすると、本人のみでなく、クラス全員も気分を変えることが出来て楽しく授業を受けることが出来ると思う。

song : Are you sleeping ?
 Are you sleeping ?
 Brother John,
 Brother John,
 Morning Bells are ringing,
 Morning Bells are ringing,
 Ding, Dong, Ding,
 Ding, Dong, Ding

この歌はよく歌われていて、リズムも知られているのですぐにおぼえられる。適宜に名前を変えたり、輪唱したりして、教室内にはいりこもうとしている“ネムケ”を一掃するのに適した歌である。又、このような歌を教材として質疑応答の練習をするとより一層の効果をあげることが出来ると思う。

For Example :

Teacher : Miss A. Stand up ?

Miss A : I stand up.

T. : Are you sleeping ?

A. : No, I am not. (I'm not.)

T. : Good. Thank you.

 Sit down, please.

A. : I sit down.

sleep, No,—not の意味は gesture 又はその他の方法で理解させ、特に No,—not の関係は母国語を使用して頭に入れさせるべきである。日本人にとっては、“はい、私はいきません。”という文章は自然に使う文であるので、Yes, ~ not の関係にならぬようにしっかりと頭にたたきこむべきである。

以上のように、入門期の学習者に対する指導の方法を図示によって説明してきたが、耳できき、口に出すという習慣性は反復練習によって、この初期段階で十分に身につけるように指導していくべきであ

る。又、大切なことは、他からあたえられるもののみの消化でなくて、自分自身で応用して文をつくり、話すという力もあわせて養成してやるべきである。

後年、実社会に出て外国語の必要性和重要性を身にしみて感じた時に、もしも外国語（英語）の勉強中に、自分自身で文を作り、発表する（話す）という能力養成とその演習が、充分とまではいかなくともなされていればある程度、自分の意志を相手に通じさせることが出来るだろうに、と痛感させられることがあると思う。一口にいえば、鉄がさめないうちに立派な刀剣をつくり出すという過程と同じく、素直に音をうけ入れる事の出来る時期に、出来るだけ多方面にわたって訓練しておくべきである。国語の時間にある語とか又は句をつかって短い文章をつくる作業をしたが、この方法は外国語の勉強においても、自分自身で文章を考えながら、即、話すという能力の育成に大いに貢献することが出来ると思う。例えば、美しい（beautiful）という語をつかって文章をつくるとすると、“花は美しい。”、“桜は美しい花だ。”、“美しい景色だ。”等の文章が出来るように、外国語でも知っている語や又新しい語を使って、文章の形式を自然に頭に入れさすべきである。但し、“かく英語”にならぬように注意して、英語で考え、英語で話すという精神を忘れないように指導する。

Example: (wrist watch を示して)

I have a wrist watch.

(pencil を示して) I have a pencil.

(ball を示して) I have a ball.

次に、have 動詞のみをあたえて、知っている単語で文章をつくらせる。

Miss A. I have a red pencil.

Mr. B. I have a desk.

Miss C. I have a nose.

Mr. D. I have a mouth. etc.

次に名詞をあたえて、

chair I have a chair

pencil I have a pencil. etc.

このようにして、クラス全体にいきたるうちに、have 動詞の意味や word-order を会得していくものである。教師 対 生徒、の練習から、生徒 対 生徒、グループ 対 グループ、列 対 列、の練習へと移行すれば活気があって、楽しく勉強することが出来る。クラスの雰囲気をよく見ながら、in, into, out, etc., の語をひっつけて練習をするのも、神経を集中させることが出来て、大いに志気を鼓舞することが出来るのである。勿論、文法的説明はぬきである。

Example: Teacher: wrist watch, pencil-case

又は花瓶にさしてある花などを示して

This is a wrist-watch.

This is a pencil-case.

This is a flower.

I have a wrist-watch.

I have a pencil-case.

I have a flower.

I put a wrist-watch into my pocket.

I take out a pencil from my pocket.

I give a flower to Mr. A. etc.,

など、上文のように幾つかの名詞を示して文章を repeatしながらその意味を身振りなどで説明すれば、暗記力の旺盛な年令だけに文章を暗記し、文の意味をのみこむことが出来る。あとは学習者自身に演習をさせて、例えば have という動詞や、または知っている名詞などをあたえて、上文のような一文となすように指導する。きかいたに演習するのではなく、興味ある方法を用いて練習をさせれば、案外とむつかしい文章も自然に頭に入れることが出来る。

日本人が外国にいて、その国の言語を勉強するとき、一番に不得手とするものは既述のように自分の意志を相手に伝えるという伝達方法に弱いことである。相手のいうことはよくわかっていても、さて自分が意志の発表をする段になると、容易に言葉が口に出てこないし、又相当な語彙力を有していても、それを活用することが出来ないという情ない状態にぶつかることがよくある。結局、耳できいて、口に出すという反復練習が不充分であった事や、専門的なむつかしい言葉は知っていても、その場所で使われている colloquial words になじんでいなかったことに気づくのである。又文法的な知識が豊富であるが為に、かえってまごつくということも出てくる。例えば、自分が話そうとする場合に文章に自信がもてず、一度頭の中で文章を作製しそれを訂正し、これで大丈夫だと思った時におもむろに口に出すという甚だ長い時間をかけてしまうという結果になってしまう事も度々見受けられる事実である。従って、外国語の勉強というものが音声に十分に慣れて、たえず外国語で考えるということ、又即座に口に出すという習慣が如何に大切であるかということを思いしらされるものである。

前述のように、Direct Method であるから外国語のみで指導するという事でなく、自国語を使用することによって、一層の理解が出てくると判断すれば、勿論その使用は生きてくるものと思う。たしかに外国語のみの指導は相当な精神的な負担をかけさせられる事も事実である。和やかな雰囲気指導者も学習者も両者一体となって、リラックスした気分で一時間を消化出来るならば、その指導も学習効果も大であるといえる。

以上のように、初期段階における直接的な指導法を少しくのべたが、これらは決して新しい方法ではない。外国語の指導者であれば必ず試みる方法である。要するに、これらをどのように長く持続させて成功させるかが問題である。この初期段階をおえて、中期段階へと進む時に材料の選択、その他に気をくばる必要があると思う。